

第 9 回第 5 次市民自治推進会議

会 議 録

日 時：2025 年 2 月 3 日（月）午後 6 時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 12 階 2・3 号会議室

1. 開 会

○事務局（藤田推進係長） それでは、お時間より少々早いのですが、第9回第5次市民自治推進会議を開催いたします。

事務局の藤田と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、山崎委員が遅参、オブザーバーとして参加いただいています斎藤広報部長は都合により欠席となっております。

それでは、お手元の次第に沿って進めたいと思います。

次第1の議事です。

ここからは鈴木座長にお願いしたいと思います。

よろしくお願いいたします。

2. 議 事

○鈴木座長 それでは、私のほうで次第に沿って進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

次第1の議事に入ります。

これまで、成人の日の行事を題材にプロセスの検証などを行ってまいりましたが、本日は、第9回の会議ということもございまして、答申に向けて市民参加の仕組みの具体化を図っていくための議論が必要となります。皆様、ご協力をお願いいたします。

最初に、（1）第2回未来の成人式を考えるアンケート調査結果につきましてご報告をお願いいたします。

それでは、事務局より資料の説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） （1）第2回未来の成人式を考えるアンケート調査結果についてのご報告になります。

今回のアンケートは、昨年5月から6月に行った1回目アンケートの追加調査として、前回と同じ対象者に対して実施しました。調査期間は、令和6年12月23日から令和7年1月10日までとなっております。

なお、現在、受託業者のほうで結果を集計・分析中であり、2月中にはまとまる予定でございますので、今回は速報ということでご承知おきをいただければと思います。

調査方法といたしまして、1回目アンケートの結果だけを送付するA群と、1回目アンケートの結果と市民会議結果を送付するB群に分けて調査票を郵送いたしました。全体の回答の結果と併せ、市民会議の結果の情報の有無による回答内容の差異を確認することも目的として実施したものでございます。

次に、調査結果については、回答数が189件、回答率は6.3%となっております。1回目のアンケートが回答数557件、回答率が18.6%でしたので、大幅に減少したという結果となっております。このため、サンプル数が十分に確保できているとは言えませんので、この結果はあくまで参考という扱いになるかと思っております。

回答の内容ですが、実施主体については、地域から祝ってほしいという回答が最も多く、調査AとBの比較では、地域のお手伝いなど自分も協力したい、自分が企画から運営まで関わってみたいと回答した方が、調査Bのほうが6～7ポイント多い結果となっております。

市民会議の結果では、地域と行政と新成人による実行委員会を希望する意見が最も多い結果となっておりますので、もしかすると、この結果に影響された可能性はあるのではないかと考えております。

次に、開催場所についてです。

調査AとBで回答の傾向はほぼ変わらず、5割以上の方が区ごとの開催を希望するという回答となっております。

右上の財源については、限られた運営資金の中でできることを実施するべきとの回答が最も多く、次いで、大規模な寄付の呼びかけなどで資金を募ればよい、行政からの補助を増やすべきとなっております。この二つは、調査Bの方が5～6ポイント高い結果となっております。

市民会議の結果では、市からの補助の増額を希望する結果が示されておりましたので、もしかすると、こちらも市民会議の結果に影響された可能性があるのではないかと考えております。

次に、右下のアンケート調査に協力した理由についてです。

調査Aは、成人式は自分にとって大事なイベント、調査Bは、令和7年1月に成人式を迎えるため身近な話題が最も多い回答となっております。

続きまして、2ページ目をご覧ください。

結果を周知することの効果ということで、2回目アンケートに新たに追加した設問となっております。

1回目アンケートの結果、それから、市民会議結果が参考になったと回答した方は6割以上で、市民会議結果に気づきや学びがあったと回答した方が6割近くおり、結果を周知することは、情報の受け取り手の考え方に影響を与える効果があった可能性があります。

次に、右上の1回目アンケート調査に回答したかという設問については、回答した方が57%程度、回答していない方は3割程度となっております。

続いて、1回目アンケートに回答していない方が、なぜ、今回は回答しようと思ったかという理由についてです。

今回は時間に余裕があった、前回は調査があったことに気づかなかったと回答した方が多く、この二つを合わせて全体の5割程度を占めております。このことから、アンケートの回答には、タイミングが合う、合わないといったところが割と大きく影響することもあります。

なお、札幌市から継続してお知らせや依頼があったから回答したという方の割合は多いわけではなく、市から何度もアプローチをすることによって回答を引き出すという観点で

は、サイレントマジョリティの掘り起こしの効果は見られなかったかなと考えております。

最後に、一番下のまとめになります。

今回のアンケートの結果から、市民会議の結果を情報提供することによる学習効果は一定程度あった可能性があると思っております。

また、同じ対象に継続してアプローチをすることは、回答数の大幅な減少につながるというデメリットがある一方で、タイミングが合えば意見を出してもらえる可能性もあります。今回は1回目アンケートの設問の内容を基本的には変えずに実施いたしましたが、例えば、今後は、設問数を少なくしたり、答えやすい内容にするなど、回答してもらいやすい工夫が必要になってくると考えているところでございます。

以上、よろしくお願いいたします。

○鈴木座長 ご報告をいただき、ありがとうございました。

それでは、皆様からご意見をいただきたいと思います。

ご意見やご質問等がございましたら、よろしくお願いいたします。

○梶井委員 情報提供の在り方とか情報提供の重要性というのは、ある程度、ここで検証されたと思います。

それで、2ページ目の一番下に情報提供の効果はあったものと考えられるというふうに微妙な書きぶりで書かれていますけれども、今回ここに書いてある情報提供というのは、アンケートの結果のことを指していますよね。

○事務局（川村市民自治推進課長） 市民会議の結果です。

○梶井委員 分かりました。

最終的に答申に向かうときには、ただ情報提供というのではなく、やっぱり、どういう情報提供によってどういう効果があったかということをはっきりと区別してお書きいただいたほうがいいのかなと思います。どちらにしても、情報提供というのはそれなりの影響力があるわけですから、どういう情報提供であったのかということまで触れておいたほうがいいのかなというふうに感じました。

○鈴木座長 同じ情報提供でも、市民会議での情報提供もありますし、市民会議の結果の情報提供もありますので、その辺をはっきりと区別できるようにというご趣旨だったかと思っております。

そのほか、いらっしゃいませんか。

○野田委員 今回、調査Aと調査Bではそれぞれ86件と103件ということで、残念ながら回答率が低かったのですが、この内訳についてです。大体同じような年齢、男女比であると、まさに情報提供の差と言えるのですが、例えば、B群のほうは高齢者が多い、若い人が少ないとか、多いとか、そういうことになっていると、そういう塊となる集団の差とはいえないので、ここが程度同じような集団であるという形になっているかどうか、この辺はどうでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） まず、調査Aと調査Bのそれぞれで回答いただ

いた方は、基本的には 19 歳から 20 歳の方になりますので、年代は一緒です。

○野田委員 変わらないのですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 変わらないです。

○野田委員 あとは、男女比とか、もしかしたら、居住区が違うのかもしれないですけども、その辺も分からないのでしたか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 調査結果のデータはありますので、調べれば分かるのですが、男女比と居住区にばらつきがある可能性があります。

○野田委員 でも、年齢があまり変わらないのであれば、ある程度同じ年代の中で情報提供があるほうが、例えば、地域から祝ってほしいという回答が多かったし、大規模な寄付の呼びかけなどで資金を募ればよいという意見が多かったとか、令和 7 年 1 月に成人式を迎えるため、身近な話題としてアンケートに協力していたとか、開催場所については差がないことが分かったということだと思うのですが、これをどう解釈するか、事務局としてはどうですか。

開催場所については、調査 A と調査 B で差があまりないということで、これでいいのかなと思いますけれども、実施主体や財源については情報提供があるほうがどういうふうに解釈できるか、この点はどうでしょうか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） まず、実施主体に関しましては、アンケートを実施した我々の立場としては、市民会議での若者の運営への参画をより望む声が多かったという結果を受け、調査 B のほうで、例えば、地域のお手伝いなど自分も協力したいとか、自分が企画から運営まで関わってみたいという若者としての立場で、もうちょっと協力していきたいという回答が多くなっていけばいいなと思っていたところです。

そういう意味では、調査 A と調査 B の差から言うと、調査 B のほうがそういったお声が多かったので、若者の参画という視点での影響というところはあったかなというふうに思っています。

○野田委員 ありがとうございます。すごくいい結果ですね。丁寧に情報提供をすれば、協力的な市民が増えるということだろうなと思います。これは、一応、統計的には差の検定をしなければならないのですが、7.2 ポイントもある場合、通常は差があると出ますので、今の結果かなと思いました。

○鈴木座長 野田委員、私も資料を見て感じたのですが、今回はサンプル数が少なかったのもあるのですが、委員会の分析として、差の検定までしたほうがいいのかというふうにお考えでしょうか。

○野田委員 検定までしたほうがいいですね。統計の知識が必要になるのですが、ソフトを使えばそんなに難しくないと思いますし、もしあれでしたら、データを渡していただければ簡単にさせてもらいます。検定までしたほうが、統計的にも有意な差があるというふうに見えますので。

例えば、一番上の地域から祝ってほしいという選択肢で調査 A と調査 B で 5 ポイントの

差があるのですが、ちゃんと差があると言えるかどうかは何となく分からないのです。1割ぐらいだから差があると言えるかなという気はするのですが、正確に差の検定までやったほうが、統計的に差があると言えると思います。

○鈴木座長 ありがとうございます。

まだ速報ということですので、どこまでというのがありますし、時間的なものもござい
ますけれども、その辺もちょっと検討していただければと思います。

そのほか、ご意見はございませんか。

○三上委員 先ほどの議論の中で、私からもちょっと似たところですが、2ページ目のま
とめのところで、同じ対象に継続してアプローチすることは、回答数の大幅な減少という
デメリットがあるという、ちょっと断定的なところが気になっています。

なぜかという、まず、19歳という年齢的なものがあるのかもしれませんが、もしかす
ると冬休みですかね。そして、調査期間が12月23日から1月10日という非常に多忙な時
期なのです。クリスマスとか年末年始というところでの回答率の低下ですので、繰り返す
ことでこれだけ異常に下がったとはちょっと言い切れないのかなという気もするのです。

ですから、結果としては下がったという結果ですが、タイミングの問題も結構大
きな要素ではないかなというふうに思っております。今回は時間に余裕があったと書いて
いますけれども、1回目は回答していなくて2回目に回答するということは、逆に言うと、
それだけ1回目に回答していない人にも届いたと言えると思いますし、1回目に回答した
人は、同じ内容だから、こんなに忙しいのに、年末年始だしというのものもあるのかなと。

ですから、何度かやる中で、それに意義を感じたら同じ内容でも回答はされるのかなと
思いますし、継続するというのは、結構、力になるのではないかなと私は勝手に感じまし
た。ちょっと断定的なので、そういう時期の問題も1回目に回答した人が回答しなかった
という要素として書いておいたほうがいいのではないかと思います。

○鈴木座長 一般的に、2回目は、言葉はちょっと悪いですが、また来たなということで
回答率が落ちる傾向にあるかと思うのですが、先ほど三上委員もおっしゃったよう
に、これは年末年始の影響もあるのかなと私も思っております。

ちょっと確認ですが、これは札幌市に住民票がある方が対象ということでよろし
いのですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） そうです。札幌市の住民基本台帳を用いていま
す。

○鈴木座長 最近の大学生は、はっきりは分かりませんが、住民票を移していない
学生が多いのかもあるのですけれども、例えば、札幌市に住民票があっても故郷が
違う可能性もあって、年末年始はいないという学生も多いかと思ったり、その辺の影響
もあるかなというふうに感じておりました。

ただ、先ほども三上委員が言ったように、断定的な言い方といいますか、その辺の表現
は変えたほうがいいのかなと思いました。その他の要因も考えられますので、その辺の表

現は考えたほうがいいのかと思っております。

そのほか、何かございますか。

では、申し訳ないのですが、同年代ということで、大村委員、感想やコメントがあればお願いいたします。

○大村委員 情報提供のところで、タイミングもあるというのは私も聞いていて同感です。

あとは、情報提供の仕方として、普段はアンケート結果だったりそういったものを郵送されてきても、読む機会がなかなかないと思いますし、紙の量だったり抵抗感みたいなものを感じる方もいるのかなと思ったので、結果などをデジタルで見られるように配付するのもいいのかなと思いました。

○鈴木座長 ありがとうございます。

片山委員、何かございませんか。

○片山委員 分析をどうもありがとうございます。

私は、すごく注目していたので、興味深く拝見しました。

データ数が少なくなってしまったというお話でしたが、調査方法には、横断調査と縦断調査があって、横断調査は一時的に広くサンプルを取る方法で、縦断調査は通時的に何年間も同じ人に同じアンケートを取る方法です。縦断調査には生涯にわたってその人の経歴を調べる場合もあって、データがどんどん少なくなっていくという難しさがあります。

ただ、病歴や発達心理、家族の影響などはどうしても縦断調査しかできないので、研究の方法として確立したやり方があります。今回はきちんとした目的があってそれに類似した考え方で調査をしていますので、データが少なくなったことで調査を失敗してしまったというふうにあまり考えなくてもいいと思います。

○鈴木座長 ありがとうございます。

では、梶井委員、お願いします。

○梶井委員 大村委員にぜひお聞きしたいのですが、情報提供について、6割の方はいろいろ参考になったと書いているのですが、4割弱の方は、あまり参考にならなかったとか、どちらとも言えないという感じです。あまり参考にならなかったとか、どちらとも言えないという4割の人、そういうタイプの人は、同じ世代でどういう感じの方なのでしょう。何かありますか。難しくてもいいと思います。

○大村委員 私の予想ですが、アンケートの結果だったり会議の結果を見たときに、自分なりに理解できたかどうかということなのかなと思っていて、その情報がちゃんと頭に入って納得できた上で回答できると、参考になったという感覚ですが、結果を見てもあまり理解できなかったような状態だと、読んだけれども、どちらとも言えないというか、そういう感じなのかなと思います。どういう人がというのは、すみません、分かりません。

○梶井委員 やっぱ、分かりやすく情報を出すことが重要だということになりますかね。

参考になりました。ありがとうございます。

○鈴木座長　あまり読み込んでいなかったというのものもあるかもしれませんね。資料としては1枚物の表裏とはいえ、内容は結構充実していましたし、分かりやすくなっていたとは思いますが、被験者がどれぐらい読み込んだかというのも少し影響しているのかなと思いました。

山崎委員、何かご意見がございましたらよろしくお願いいたします。

○山崎委員　全体として、札幌市のような大規模な自治体の市民を対象としたアンケートとして、量的な把握と、もう一つ、我々の会議でも追求していた質的な把握についても一定程度の成果が見られたということで、量と質をどういうふうにも両立して市民意識・合意を形成していくのかに関しては、事務局のご苦勞の賜物というところもあって、成果が見えたと私も受け止めた次第です。

○鈴木座長　ありがとうございます。

そのほか、何かございましたらよろしくお願いいたします。

○事務局（市民参加推進担当係長）　先ほどの男女の割合についてご報告させていただきます。

まず、調査Aのほうですが、男性が36.5%、女性が62.4%、その他が1.1%です。それから、調査Bのほうですが、男性が47.5%、女性が50.5%、その他が2.0%となっております。

以上でございます。

○鈴木座長　男女比について情報をいただきました。ありがとうございます。

では、野田委員、お願いします。

○野田委員　ということは、調査Bのほうが女性の割合が多いということですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）　どちらも女性の割合が多いです。

○野田委員　調査Bのほうが均等で、調査Aのほうが女性の割合がより多いのですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）　そうです。調査Bのほうが均等で、Aのほうが女性の割合がより多い形になっております。

○野田委員　そうすると、調査Aと比べると調査Bのほうが男性の割合が多くなるので、男性の割合が多くなると、情報提供の効果以外に男性が多くなっている効果というふうに読み取られる可能性があるということですね。

でも、通常は女性が多いほうが協力的になるのかなと思ったのですが、今回は男性が多いという効果がもしあるのだったら、男性が多いほうが、地域の手伝いなど自分も協力してみたいとか企画から関わってみたいという割合が高くなりましたし、成人式を実施する必要がないとか、中止すべきとか、参加者から費用を徴収したらよいといった否定的な意見も抑制されるというか、ちょっと協力的になるかということですかね。

ですから、男性が多くなっている効果も若干入ってしまっているという問題はあるということ踏まえた上で、ただ、情報提供の効果というふうに解釈してみたらというような、そういう言い方ですかね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 今申し上げた割合は、回答者の割合でございますので、お送りした男女比というのはまた別です。ただ、それほど差がつかないように割っていることにはなっています。

○野田委員 調査Aの回答者の割合、調査Bの回答者の割合ですね。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 先ほど申し上げた割合は、回答者のうちの男女の割合になります。

○野田委員 そうですね。本当は、バランスチェックといって、調査Aも調査Bも完全に一致しているほうが望ましいのです。完全に一致しているグループが二つあって、情報提供の差だけがあったら情報提供の効果と言えるのですけれども、今回は、情報提供の効果以外に、グループの中にいる男女の割合がもともと違うので、その違う割合が効果として出てしまっているということです。ですから、男性が多いことによる効果もちょっと入ってしまっているという課題はあります。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） ありがとうございます。

○鈴木座長 そのほか、何かございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 続きまして、（２）のこれまでの議論を踏まえた仕組みの検討についてです。

冒頭に申し上げましたとおり、議論の材料としてたたき台などの用意をしていただいているようですので、それらの資料を参考にしながら、仕組みの具体化を図っていきたいと思います。

それでは、事務局より資料のご説明をお願いいたします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 引き続き、よろしくお願いいたします。

資料２に基づいてご説明申し上げます。

まず、今、鈴木座長からもお話がありましたとおり、予定としては、次回の第10回会議が最終となっております。本日の議論を基に事務局が答申の素案を作成し、委員の皆様にご確認いただいた上で、次回会議に答申案をご提示できればというふうに考えております。

そのため、本日の残り時間で、可能な限り、答申する仕組みの内容の具体化を図っていただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、資料の３ページをご覧ください。

これまでの会議では多様な視点から議論を重ねていただきましたので、一度、全体像を整理する意味合いでご用意しております。

まず、今回の検討の背景でございますが、札幌市は、人口減少、少子高齢化といった課題に直面しており、持続可能で希望のあるまちを次世代に引き継いでいくために、限られた資源をいかに効果的に配分するかが重要な課題となっております。

そのためには、政策形成の過程で市民の意見を的確に把握し、反映させることが今まで以上に求められておりますし、ＩＴの進展やライフスタイルの多様化によって、市民参加手法のアップデートも必要があるものと考えております。

一方で、現在の市民参加の仕組み自体には大きく二つの課題があると考えております。

まず、市民全体の声を十分に把握できていないのではないかという点でございます。アンケートやワークショップ、パブリックコメントなど、様々な手法で意見を収集しておりますけれども、参加者に偏りが見られ、多様な市民の声を十分に把握できていないのではないかという課題でございます。

次に、政策形成過程の市民参加が限定的ではないかという課題でございます。市民の意見が求められるのは政策がほぼ固まった段階であることが多く見られるため、市民の意見が政策に反映されているという実感が得られにくい状況になっているのかなというふうに考えております。このようなプロセスでは、市民の信頼を得ることが難しく、市政の停滞につながることもあります。

こうした現状などを踏まえ、今回の会議が最終的に目指すところとして、札幌市全体や将来を見据えた意見を持つ市民が増え、行政と市民が共に課題解決に取り組める、そういった仕組みになればよいということが共通認識であったと思っています。

そして、仕組みを構築するに当たっての方針といいますか、押さえるべきポイントとして、大きく三つの柱を中心に議論が進められてきました。

まず、全体像の共有と情報提供の工夫でございます。

市民に的確に意見を言うてもらうには、政策の背景ですとか意義を正確に理解してもらう必要があり、予算や税金の配分も含め、政策全体の流れを明確に示していくことが重要だと考えられます。

また、単に情報を提供するだけではなく、生活に関連づけた説明や実際に関わる人の声を届けるなど、より分かりやすく伝える工夫が求められております。それから、エピソード風の説明、視覚的に伝わりやすいような資料の活用も重要なポイントになっております。

次に、多様な市民意見の把握でございます。

市政に積極的に関わる市民の意見は多く取り入れられていると考えられますけれども、より多様な視点を反映するためには、サイレントマジョリティの意見をどのように拾い上げるかが課題になっております。

そのため、無作為抽出や統計的なサンプリング調査を活用し、市全体の意見の傾向を把握する仕組みを整えることが必要だと考えられます。また、市民の年齢、性別、居住地域、職業など属性ごとの意見の違いを分析し、政策形成に適切に生かすことが求められております。

最後に、政策形成過程の参加促進でございます。

市民が意思決定に関与できる機会を増やすことが、市民参加の意義を高めていく上で重要だと考えております。特に、政策形成の初期段階から市民が関与できる仕組みを整えることで、意見が反映されやすくなり、最終決定の段階で反対の声を減らしていくことにもつながると考えられます。

また、検討結果だけではなく、議論の過程も市民と共有することで、透明性を高め、市

民の信頼や納得感を向上させていくことにつながっていくと考えております。

このようなことを事務局として整理しております。

こうした議論の流れや、次の資料でご説明させていただきます成人の日行事での実験結果を踏まえ、本日の会議では、多様な市民の意見をどのように把握するのがよいか、収集した市民の意見をどのように市政に反映するのがよいかの2点につきましてご議論いただき、仕組みの具体化に向けた整理をお願いできればと考えております。

次に、4ページの成人の日行事の在り方検討のプロセスから確認された効果でございます。

この実験では、具体的な市政課題を用いて、サイレントマジョリティの掘り起こしや、多様な意見を収集、整理し、市民を交えて議論していくことで、政策の方向性を導き出すプロセスを検証し、仕組みづくりに生かすということが試みとしてありました。

市にとっては、アンケート、地域へのヒアリングの結果などを基に市民会議で議論を行い、最終的に政策の方向性を具体化できたことは大きな成果だったと考えております。

資料では、プロセスを通じて分かった効果を二つに分類、整理をしております。

まず、左下のプロセス全体の効果でございますが、一つ目は透明性の確保です。

市民の意見を集めるだけではなく、そのプロセスを公開して政策決定に至るまでの流れを明確に示すことで、意思決定の透明性が高まったのではないかと考えております。

特に、アンケートや市民会議の結果を公表し、それをさらに地域の関係者とも共有することで、政策形成のプロセスが見える化された点が重要だったと認識しております。

次に、多角的な分析の実現でございます。

意見収集の各段階で異なる手法を組み合わせ、属性ごとの意見を把握した上で収集することに着目したところ、従来、行政のほうで行うアンケートよりも多様な視点から分析することができたのではないかと考えております。

特に、世代ごとの意見の違いが明確になったということもありまして、その違いを意識しながら様々な世代の方が話し合うという試みもありましたので、その中で個人の意見も変容していくという経過も観察できたと考えております。こうした視点を取り入れていくことで、特定の世代や立場に偏らない政策形成につながっていくものと考えております。

さらに、段階的な意見の整理と新たな視点の取り込みの効果も確認されたと考えております。行政が最初から政策の方向性を決めるのではなく、段階的に意見を収集し、整理しながら政策を形づくっていくことで、誘導ではなく、いわば自然に意見がまとまっていく様子が観察できたかなと思っております。

また、想定していなかった新たな視点を柔軟に取り込めた点もこのプロセスの強みだったと思っております。

具体的には、意見収集の中でクラウドファンディングを活用してはどうかというご提案をいただいております。それを契機に地域とも共有したところ、実際に一部の区では、先日の成人式で、集まった寄附金を原資に新成人の方に記念品を作成してお渡しするとい

うことが行われました。この取組の好例だったかなというふうに思っております。

さらに、市民会議の結果、若者も主催者側に加わってはどうかという意見も多かったということで、若者の参画に着目した新たな検討も開始されようとしているところでございます。

次に、右側のサイレントマジョリティの掘り起こしに有効な手法ということでまとめております。

まず、無作為抽出によるアプローチです。

無作為抽出を活用し、幅広い市民が参加できる機会を創出することは、市政に参加するきっかけとして有効であったと思っています。

例えば、市民会議の参加者の約8割が、ふだんは市政に意見を言う機会がほとんどない、または、ないと回答されておりましたが、こうした例のように、無作為抽出を入り口として参加機会を提供することが新たな意見の掘り起こしにつながるのではないかと考えております。

次に、SNSを活用したアンケートによる意見収集でございます。

スマートフォンを通じて手軽に回答できる仕組みを整えることで、ふだんは忙しくされている現役世代の方を中心に意見を短期間で収集できることが確認されました。

実際にSNSを使ったアンケートの回答者のうち、2割から3割の方が、回答した理由として、ふだんは市政に意見を言う機会がないという選択肢を選ばれており、こうした仕組みが現役世代やふだんは意見を言わない層の意見を取り入れる手段となることが分かったかなと考えております。

最後に、参加経験を通じた市政の参加意識の向上です。

市民が議論に加わって意見を述べる機会を持つことは、市政への関心や継続的な参加につながる可能性があるというふうに考えております。

実際に、市民会議の参加者の約6割が、会議後に、市政課題の解決に向けて意見を言ってみたいと考えられていたり、8割から9割の方が、同じような会議があれば参加したいと回答いただいております。これは、単発の意見収集ではなく、継続的な関与を促す仕組みにつながっていくものと考えております。

このように、政策形成の初期段階から幅広い意見を収集し、議論を深めながら方向性を整理していくというプロセスから、政策形成の透明性や市民の納得感を向上させるためのヒントが得られたと考えております。

また、サイレントマジョリティを含めた幅広い市民の意見を反映させるためには、多様な手法を組み合わせながら参加機会を広げていくことで、効果が高まっていくと考えております。

これらを踏まえ、5ページからは、仕組みづくりの具体化に向けたご説明に移らせていただきたいと思います。

サイレントマジョリティモデル（たたき台）というタイトルになっております。

市民意見の的確な把握に当たりましては、例えば、この会議の中でも、サイレントマジョリティにも様々な層があるのではないかと、すなわち、それぞれの特徴に応じた適切なアプローチもあるのではないかとという観点からご指摘をいただいております。

また、どこまでいってもサイレントマジョリティはサイレントマジョリティのままではないかというような視点も重要だというふうに考えております。

そこで、これまでの議論や実験の結果、それから、参考に札幌市で行っていた調査などを基に、市政への関心度と行動意欲によって4層に分類したモデルを試しに作成してみましたのでございます。

行動意欲の指標を設けたのは、実験を通じ、テーマに関心があるということだけではなく、家族など周囲の勧めですとか、謝礼を受け取ることができるといったこともきっかけとなって、ご意見をいただいたり議論に参加いただけたりする可能性があることが確認されております。

また、参考情報として枠外に記載しておりますが、例年、札幌市で行っている指標達成度調査という調査の結果からも、市政に関心があっても参加しないという方もいれば、関心がなくても、負担が少なければ参加するとか、条件次第で参加を考えてもいいという方も一定数いることが分かっております。そういったことを考慮し、行動意欲という指標を設けたところでございます。

これらの層は固定的ではなく、テーマによって変動することも考えられ、アプローチ方法も柔軟に考えていくことが重要だと考えております。

まず、各層の説明でございますが、積極参加層ということで一番上に記載をしております。この層は、市政に強い関心を持っていて、意見を発信する意欲が高い方々という分類をしております。そのため、様々な手法を活用するとともに、継続的な参加を促していくことが求められると考えています。

次に、その下の潜在参加層（負担軽減型）ということで、表でこれより下にある層がいわゆるサイレントマジョリティ層を想定しております。負担軽減型とありますけれども、この層は、市政には関心がある程度あるものの、時間的、労力的な負担があって、なかなか意見を出してもらえないような方々になっていきます。例えば、仕事だとか家庭の都合で参加することが難しいといったケースが考えられます。

そこで、アプローチ方法としましては、SNSでのアンケートを活用したり、無作為抽出のアンケートといった手軽に参加できるものや、市民の関心の高いテーマを設定して市民会議を行うことで意見表明の機会を広げていくことが有効なアプローチになると考えているところでございます。

続きまして、潜在参加型（きっかけ型）でございますが、この層は、市政への関心がそれほど高くないものの、参加依頼だったり謝礼など魅力的な条件が提示されることで、参加する可能性がある層として設定をしております。

普段はあまり積極的に参加をしていなくても、特定の問題については意見を持っている

という場合もあるので、きっかけを提供することで参加を促していくというのが方針になると思います。

この層に対しては、特に参加を促す観点から、SNSアンケートもそうですし、ミニ・パブリックスということで無作為で抽出して参加を後押しするような仕組み、それから、中長期的に市政への関心を高めていくということも必要な方策になるかなと考えております。

最後に沈黙層でございます。

この層は、市政への関心の有無に関わらず、基本的に参加をしないというような市民でございます。

この層に対しては、直接的に即効性のあるアプローチが難しいので、十分なサンプル数を確保することで、間接的に意見を推測していくことになりますが、市政への関心を徐々に高めていくための参加意識の醸成という観点で、中長期的な方策を用意することが求められていると考えております。

このように、市民の関心度と行動意欲に基づいて分類し、それぞれに適した方法でアプローチをすることで、多様な市民の意見を収集することができないかなということで試しにモデル化したものでございます。

続いて、6ページの持続可能な参加のための取組や参加意識を醸成するための取組でございます。

これまでの議論では、即効性のあるものを求めるだけではなく、中長期的な視点から市民参加意識を醸成する必要性というところにご指摘をいただいていたと認識しております。長期的に参加を継続し、定着させていくことですか、参加意識を醸成していくという観点の取組も非常に重要なことだと事務局としても考えております。

こうした観点から、これまでの議論の中で出てきたアイデアですとか、事務局からお示ししたものもありますけれども、こちらの表に整理をさせていただきました。

四つの取組がございますが、まず、（仮称）市民サポーターズ制度でございます。

この制度は、市民がアプリ、それから、今はLINEを活用しておりますけれども、LINEなどで登録をしていただいて、定期的にアンケートをしたり、結果をフィードバックできる仕組みを整えるというものでございます。これによって、気軽に意見を述べられる負担の少ない参加機会を提供し、積極参加層の継続的な関与、また、潜在参加層が参加するきっかけとしても活用できると考えております。

一方で、想定される課題としましては、例えば、登録者の属性が偏る可能性があったり、途中で参加意欲が低下し、離脱してしまうリスクも考えられますので、参加意欲を維持するための工夫が必要になってくると考えております。

次に、（仮称）市民ファシリテーター制度でございます。

この制度は、市民がミニ・パブリックスやワークショップ、意見交換会などにご参加いただいて、議論を活性化する役割を担っていただくものでございます。これによって、市

民が単に意見を述べるだけではなく、議論を深める役割を果たすことで、より実りある議論ができるようになればと考えております。

この制度では、市民ファシリテーターの育成プログラムや研修会を実施し、市民自身が政策形成の議論を支援していく役割を担っていただくための取組をしていくことが考えられます。また、市民ファシリテーター同士で安心感をつくり出し、横の連携といいますか、仲間づくりの場として機能させていくような観点も求められていくかなというふうに考えております。

想定される課題としましては、まず、参加者の確保、それから、ファシリテーションのスキルの習得にかかる負担感や継続的な活動のインセンティブをどう設計するかも課題になってくるかなと考えております。

三つ目に、学校教育での市民参加プログラムということで、市政への関心を長期的に育むために、例えば、小・中学校で市政課題をテーマとした授業を実施し、市政について学ぶ機会を増やすことを目指していく、それから、この取組によって、子どもたちが社会の課題について考えたり、意見を持ったり、社会に関わる力を育成し、将来的には市民自治を担う意識を持った担い手、市民を育成することを目指していくことを内容として記載しているところでございます。

想定される課題としましては、学校の授業としてどのように組み込むか、子どもたちの関心を引きつけるためにはどのような工夫が必要なのかも検討する必要があると考えております。

最後に、市民へのフィードバックの強化ということで、政策形成における透明性を高め、市民の信頼を向上させるためには、市民会議やアンケートの結果を広く発信し、政策形成の流れを分かりやすく伝える取組を進めていくことが重要だと考えております。それから、情報を受け取るだけの現状の市民の方にも届く形で発信し、市政への関心を喚起していくことも求められていくと考えております。

一方、課題としましては、情報発信の手段によっては市民に届かない可能性もありますし、受け手側の関心を引く工夫が求められています。さらには、発信する情報が多過ぎると、重要な内容を見逃すリスクも想定されますので、これらの観点についても検討が必要になってくると考えております。

以上の四つの取組を各種の市民参加の手法と組み合わせながら、あるいは並行して行っていくことで、長期的な市民意識の醸成や継続的に市民参加を支える仕組みを目指していければと考え、整理したものになっております。

最後に、7ページの新しい政策形成プロセスモデル（たたき台）でございます。

市民の多様な意見を政策形成に反映させるためのモデルを事務局でご用意させていただきました。

これまでの議論や実験を通じ、市民の意見を政策にしっかりと反映させるためには、成人式の実験の中でも効果があったように感じておりますけれども、段階的に意見を集めて

整理をしながら、政策の方向性を具体化していくというプロセスが必要ではないかと考えております。

一方で、現状では政策形成過程での市民参加が限定的という課題にもあるように、いつ、どのような手法を用いるかということで、実際には個別の判断は担当部署のほうで行っていることもありまして、結果的に政策の最終段階で市民参加が行われ、意見反映も形式的になっているというような状況もあります。

そこで、情報提供の工夫や多様な市民の参加も念頭に置きながら、政策形成を段階的に柔軟に進めるための新しいプロセスが求められると考えております。

このモデルにつきましては、政策形成の初期段階などで幅広い意見を収集する意見収集ループ、それから、その結果を基に政策の方向性を具体化する議論のループを組み合わせていくことを考えております。

図をご覧くださいますと、上にあるのが意見収集のループ、その間に確認フェーズというものを設け、その下に議論ループを組み合わせしております。

最初に、意見収集ループのご説明をさせていただきますが、このループの目的は、政策をつくる最初の段階で多くの市民の意見を集め、課題を抽出していくということでございます。

対象については、全ての事業に適用するわけではなく、基本的には札幌市自治基本条例の趣旨に照らし、市民参加が必要と判断される場合に実施されることとなりますけれども、そのうち、市民の意見を踏まえた方向性の整理が必要な施策、それから、短期間で決定する必要があるような施策が対象になってくるかと考えております。

流れとしては、まず、行政が課題を認識するところから始まります。日常的に寄せられる市民の声、それから、市民意識調査などのデータを活用して現状の課題を分析し、意見収集のテーマや手法をこの段階で慎重に設計します。

次に、市民と行政が課題を共有した上で意見を収集する段階に入ります。市民にとって、なぜ、この課題が重要なのかとか、どのような視点で意見を出せばよいのかといったところが明確でなければ、的確な意見が集まりにくくなりますので、情報提供を工夫しながら、SNSでのアンケートをはじめ、いろいろな手法を活用して意見を収集します。

収集した意見は、行政内部で分析と検討を行い、政策の方向性を探る材料とします。そして、フィードバックの段階でその結果を市民や関係者に共有し、どのような意見が集まって、どのように活用されていくのかを示すことで、透明性を確保していきます。

ここで適切なフィードバックを行わないと、市民が意見を出しても意味がないと感じられて、次回以降の参加意欲の低下につながる可能性もありますので、意見収集からフィードバックまでのプロセスを一貫して設計することが重要になってきます。

ここで、左側の図の中央にある確認フェーズについてご説明をさせていただきます。

この確認フェーズは、意見収集のループと議論のループの間にありまして、政策形成を柔軟に進めるためのプロセスになっています。

この段階では、収集した市民意見や議論の進展の状況を整理し、次にどのようなステップに進むのかを判断することになります。判断の主体は基本的には担当部局になりますが、政策の性質や影響の範囲に応じて変わってくることが想定され、例えば、予算や条例改正が必要な場合には、最終的に市長と市議会が決定していくことになります。

この確認フェーズでは、例えば、十分な意見が集まったので議論の段階に進むとか、意見が不足しているので追加の意見収集を行う、それから、政策が方向性として固まったので実行段階に移るといった判断が考えられます。こうした判断には、市民意見がどれぐらい反映されたのかとか、どれぐらい論点が整理されたかといった視点が考慮される必要があると考えています。

続いて、議論のループについてご説明させていただきます。

これは、意見収集ループの段階で集めた市民の意見を基に、具体的な政策の方向性を議論して合意を形成していく段階になります。

このモデルでは、市民の意見を集めた後、それを行政の知見と統合しながら進めていくことを考えています。重大な事案の決定は議会や市長が行いますけれども、その過程に市民の意見を適切に反映していくことを重要視しております。

この議論のループの対象となるのは、市民の生活に大きな影響を与える施策、長期的な議論が必要な施策などについて、多様な視点を取り入れながら慎重に検討を進める必要があるため、対象としております。

この議論のループでは、まず、意見収集の段階で集めた情報を整理し、議論のテーマを設定します。それから、ミニ・パブリックスなどを活用し、具体的な政策案について議論を進めます。それから、議論の結果を分析し、政策形成に生かしていくと同時に、フィードバックの段階で市民や関係者と共有をします。そして、確認フェーズにおいて、再度、必要があれば意見収集に戻るのか、それとも、実行段階に進めるのかを判断する流れになっております。

この政策形成モデルは、市民参加を単なる意見収集にとどめず、政策形成のプロセスの中に組み込むことを目的としています。初期段階から市民の意見を収集することで、政策形成の方向性を明確にし、議論を通じて透明性を確保していくことで、最終的に市民の納得感の向上に寄与していくのではないかと考えて設計をしたものでございます。

なお、このモデルを効果的に運用していくためには、下段の部分ですけれども、政策の規模やテーマに応じた適切な手法を選択し、組み合わせることが原則となります。

また、運用のルールを明確化し、客観性を確保するためには、ガイドラインを策定することと、庁内のチェック体制を構築する必要があると考えております。

具体的には、どのような施策にループの考えを適用していくのか、それから、意見収集や議論の段階でどのような手法を選択するのかといったルールを整理し、政策形成のプロセス全体も含めてガイドラインに盛り込んでいく必要があると考えております。

なお、ガイドラインにつきましては、その必要性や章立て、盛り込むべき項目まで前回

に議論をいただいたところですが、ルール精査や時間的な制約もあり、この会議の中で細部までつくり込むのはなかなか難しいと考えますので、もし可能であれば、答申の中でガイドラインの骨子まで示すという形も想定されます。

最後に、このいずれのモデルもたたき台ということで、まだ十分な検証を経たものではなく、今後さらに実践などを通じて精緻化していく必要があると事務局としては認識しております。

これらの概念というか、モデルを答申に盛り込んで、さらに具体的な事例に適用しながら引き続き検証していくのがよいのか、あるいは、お示ししたモデルは、特段、答申に盛り込む必要がないのかとか、さらによいものにするためにはどのような視点が必要かといった観点からご議論をいただければ幸いに存じます。

説明は以上でございます。

○鈴木座長 ご説明をいただき、ありがとうございます。

先ほども申しあげましたように、今回は第9回目の会議となりますが、第10回の会議の中でまとめていく予定としております。

したがって、今回の会議につきましては、資料にもございますように、第10回を迎えるに当たって、仕組みの具体化に向けた議論ということで、ただいまたたき台を出していただいたところです。たたき台ということではございますが、これまでの議論等を踏まえ、非常に分かりやすくまとめていただいたと思っております。

ただいまご説明した内容を参考に、仕組みの具体化に向け、答申も念頭に置いた議論をしていただきたいと思います。

それでは、皆様からご意見等ございましたらお願いいたします。

○梶井委員 5ページ、6ページはすごく分かりやすく表になってまとまっているので、ここは説得力があるし、受け入れやすいと思いました。

最初のページで質問ですが、政策形成過程への市民参加が限定的なのだろうと思います。その説明文の中間から、政策形成の過程でネガティブな意見やデメリットが広まることによって、市民の信頼が得られず云々とあるのですけれども、多様な意見をいろいろと収集していくと、必ずネガティブなものやデメリットなものも集まります。それが多様性ですから、それが最初にコアとして来ることもあると思うのです。これは誰がどのように広めたネガティブ性やデメリットを想定されているのかというのは、市民の方から必ず疑問が寄せられるところだと思うのです。

さらに、今、物を言っている我々は声の大きいマイノリティーなのか、それをここで想定しているのかというような意見は出るのではないかと感じます。だから、ここの書きぶりはもうちょっと慎重にされたほうがいいのかと感じました。

○鈴木座長 偏りが生じるみたいな感じでしょうか。

○事務局（川村市民自治推進課長） この資料の表現については、確かに梶井委員がおっしゃるような感じ方をされたかと思います。政策の固まった段階でと前の文章にもあるの

ですが、今、市民参加の機会というのは主にパブリックコメントしかやっていないと言っても過言ではない感じで、ほぼ本決まりになってからパブコメをやっています。パブコメで出てくる意見はほぼ 100 パーセントが反対の意見のような状況なので、そこにスポットが当たってしまうと、市民理解が得られていないという論調になって、市政が停滞する場面が見受けられるというのが現状の展開です。そこをちょっとストレートに書き過ぎているというか、反省しています。

○梶井委員 言わんとしていることは分かります。政策形成過程の初期段階、初期段階と後半に物すごく書いていらっしゃることと呼応すると思うのです。ですから、その初期段階というのはいつかということはもう少し具体的にお示しになったほうがいいのかなとも感じています。

その意味では、ここはなくても、市民参加が限定的で形式的になっているというところだけで十分なのかなと私は思いましたけれども、その辺は、もう一回、慎重にご検討いただければと思います。

○鈴木座長 ご意見をいただき、ありがとうございます。

そのほか、ご質問やご意見はございませんか。

○山崎委員 全体で言うと、この市民自治推進会議で最初からテーマにしていたサイレントマジョリティをどうやって把握するかという問題なのだろうと思います。

今回の成人式は、若者へのアプローチ、例えば、世代間バランスなどにも留意しながらいろいろなことをやって、うまいこと出てきたというところがあるわけです。

ただ、先ほどの梶井委員のお話のように、今回成人式でやったように、すごく妥当な、真つ当な意見が出てきて、「そうだ」とみんなが納得するとは限らない政策課題や争点というのは世の中にいっぱいあるわけで、いろいろと考えていく必要があるのではないかと私は改めて思っています。

我々の今回のものは、あくまでも非常にうまい真つ当なモデルケースだったけれども、場合によっては炎上してしまうとか、そういうこともあって、ひょっとしたら、そういう炎上ケースみたいなものを我々が検討して、どうしたら炎上しないでいられるだろうかとか、炎上するのはなぜなのかというようなケーススタディーというのもひょっとしたらやったほうがよかったのかもしれない。そうしたこともあり得るということで、成人式はあくまでもつつがなくうまくいった例であったと思います。

何が言いたいかというと、サイレントマジョリティを酌み取るときに、そこが妥当なものとなっていくよう、条件整備とかそういったものをちゃんと踏まえておかないと、至極妥当なサイレントマジョリティになり得るかどうかというのは全く分からないわけです。ただ、7 ページまでの説明を聞いていると、その辺は慎重におやりになられているのだろうというのは理解しているつもりです。

その中でも、特に、大事にされていて、そこはそのとおりだなと思うのがフィードバックです。やっぱり、きちんと返していくことを丁寧にやっていくというのが、多分、

今までやっている札幌市の市民参加に新たに加わっていく意義ではないのかなと受け止めました。

それから、部分的なことで幾つかコメントさせてください。

サイレントマジョリティの行動意欲というところが5ページにあるわけです。6ページや7ページにも関わってくるかと思いますが、もう一つ大事なのが、自分たちの言った声が政策にどれだけ実現されたか、反映されたかということだと思います。

プロセスのところでは、反映されたというのも大事ですけども、今回、もう一つ、本当はあったほうがいいのは、若者の声や市民会議の声で成人式が変わったのですよとか、ちょっとでも改善された点をもう一回フィードバックすることです。その上で、最初に参加してくれた人はどうでしたかみたいになると、市民会議やアンケートに関わってよかったというような政策実現の実感というか、政治的有効性感覚という言い方もあるのですが、そうしたフィードバックが一番大事な部分だと思うので、今回の成人式のところでも、時間的な制約はあるけれども、何かフォローをしてくれるとありがたいというのが一つです。

もう一つ、サイレントマジョリティをしっかりと酌み取って丁寧にやっていくときに大事なのが、これは改めて言うまでもないことですが、事務局の方が物すごく手間暇をかけて、手塩にかけてしっかりといろいろなことに向き合ったからこそ可能なわけで、今回のような形でどこまできちんとバックアップ体制と膨大な労力、予算をかけてやっていくかという条件整備もこれからのポイントになってくるのではないかと思います。

最後に、ここは私の専門ではないけれども、今日的な動向で言うと、意見収集等のループや議論ループのところでもAIを使うとか、そういったところはこれから検討していくのかどうか、これは絶対にやらなければいけないというわけではないですけども、何か見通しなどがあったらコメントをいただければということです。

○鈴木座長 事務局からコメントはありますか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 大変貴重なご指摘などをいただいたと認識しております。

私から補足が2点ありまして、まず、一つ目のフィードバックの観点で言いますと、今回、成人式に参加された方には何か大きく変わったということはないのですが、先ほどの説明の中で申し上げたクラウドファンディングでは、白石区と豊平区の式を対象に地域の方にも一緒に配っていただいたりして、平岸高校の生徒さんに記念品をデザインしてもらったタンブラーを1月にお渡しできたということが成果としてあります。

この件に関しては、都度、地域の主催者の方々にもフィードバックをしております、成人式が終わった後、市民会議の結果と、そういった寄付の活用や若者参画ということが市民会議の中で方向性として出たので、今後はそういった観点で検討を進めていきたいということをご報告する機会がありました。その際、地域の方からは、特段、大きな異論はなかったので、そういう意味では結果は受け入れられたのかなというふうに感じております。

クラウドファンディングでお配りした記念品は、保護者の方にすごく好評だったという
ようなお話と、式典の会場は、基本的には皆さんが滞留するので、なかなか出ていかない
現象がどこの会場でもあったのですけれども、出口のところで帰り際に記念品を渡すよう
にしたら、皆さんがスムーズに帰るようになったといった効果もあったと聞いております。
フィードバックに関係することとしてお伝えをさせていただきます。

また、I Tの活用の関係は、今回の会議の中では深く検討できなかったのですけれども、
今後はデジタルプラットフォームを使ったような取組も検討していきたいと考えておりま
すし、サイレントマジョリティの掘り起こしのほかにも、行政職員の負担軽減や時間短縮
といった観点からも、デジタルの活用は必要な視点かなというふうに考えております。
○鈴木座長 今回は、SNSでのアンケートの呼びかけということで効果が結構あったの
ですけれども、今もお話に出ていましたように、ツールとしてなのか、情報のやり取りな
のか、いろいろあるかと思います。

I C Tやデジタルの活用というのもどこかに文言として入れておいたほうが、今後の効
果が期待されるような話になってくると思いますので、その辺もちょっと触れてもいいの
かなと思いました。

○事務局（神市民自治推進室長） A Iということであれば、私どもはやっていませんけ
れども、敬老パスの関係で、そのセクションでいろいろな人たちにネット上でアンケート
を実施し、若い人とかいろいろな人の意見をA Iを使って分類しているのです。そういつ
た新しい技術を使ったということも聞いております。

A Iという部分では、今はそういったものができているようで、それを活用して意見を
分類し、すぐに見られるようにしています。例えば、賛成の人とか、敬老パスに対してや
っぱり見直すべきだと言っている人の意見はこんなふうになっていますとか、反対してい
る人たちはこんな意見だということをA Iの技術をもって見せていると聞いています。

○山崎委員 あれがD-Agreeというものですか。

○事務局（神市民自治推進室長） はい。

○鈴木座長 最近では、本学の会議でも議事録やまとめに結構使っています。

○事務局（川村市民自治推進課長） 手法に関しては、山崎委員のご指摘にもあったよう
に、こういう仕組みがいいのではないかとある程度固めた後でも常にブラッシュアップが
必要だと思っています。

今回、アンケートの方法については従来の紙からSNSを取り入れましたが、それ
がつい最近の出来事ではないにしても、今、我々はやっ取り入れて、物すごく効果
があるとかいろいろと分かったこともあるので、そのときの最先端ではないにしても、これ
は効果があるな、使えるなといったものはどんどん取り入れてやっていくことが必要だと
感じています。

○鈴木座長 そのほか、何かございませんか。

○片山委員 取りまとめをありがとうございます。終わりに近づいてきたなという感じが

して、意義深いです。

7 ページのプロセスモデルのたたき台について質問させてください。

右側のバーの中に課題の認識、意見収集、分析と検討、フィードバックという4本の矢があって、これが左側の円に相当するのであれば、フィードバックがあって、課題の認識にまた戻る場合もあるということですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） おっしゃるとおりです。必要があれば、フィードバックをした段階で、また新しい課題だったり、もう少し追加で意見収集をしたり、明確にしていってほしい事柄があれば、もう一度、意見収集をすることを念頭に置いています。

○片山委員 そうすると、フィードバックは、レポートを出したり、ステークホルダーへの説明だけではなく、何かそこで議論もあるということですか。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） フィードバックは簡易レポートを共有した反応や関係者に意見を聞いた結果までを収集します。それを集めて、確認フェーズという段階でどうしたらいいのかを検討する時間を設けていますので、この段階で、もう一度、質問を繰り返したほうがいいのか、それとも、意見が明確になったので実行段階に移るかどうかといったことを判断することになっています。

○片山委員 そうすると、円の4本目と1本目の間に確認フェーズが刺さってくるのですね。分かりました。すごく意味があるので、こうなって、こうなって、こうなってと追いかけていくのがすごく興味深いのです。

○三上委員 このポンチ絵ですけれども（図にフリーハンドで矢印などを追加記入したものを示しながら説明）、ここで課題なり問題意識なり何かが発生して、これは左回りでこのままやっていっていいと思うのですけれども、最後にこの確認フェーズに入って、もしできれば、下の議論ループは右回りで、ここから入ってきて確認してから、今度は逆に入ってきて、またここで回るのか、それとも、8の字にまたこちら側に行くのか、その結果で議論をして、最後に実行へ抜けるということかなと思います。

だから、多分、全体としての政策決定の市民の部分のところはここでいいと思うのですけれども、前の段階からちょっと大きな図があった中のプロセスで、ここで、今までは意見収集のループもしていないと言ったら変ですけれども、分析検討とかタイミングが悪かったというのはあるのですけれども、全体図を書くと、この意義がもっと分かりやすかったり、8の字が上だけで十分だねと終わってそのまま実行へ抜けていたり、それとも、実行しないということに落ち着いたりというほうが分かりやすいかなと思いました。

○事務局（川村市民自治推進課長） 確かに、今、お話をお聞きして、8の字の形は何かイメージができましたので、この図は作り直します。

○鈴木座長 8の字で、方向性でぐるぐると回るようなイメージの概念図のほうが分かりやすいということですね。

○三上委員 この間、ちょうど別の図で見たものがあったって、チームがどういうふうに変化

していくかという、ダイナミックリレーリングというのがあるのです。それまでは、タックマンモデルというのがあったのですがけれども、ダイナミックリレーリングというちょうど8の字で回っていくというのがあって、それを見たときに、そうだなと思ってちょっとイメージしてみました。

○事務局（川村市民自治推進課長） 補足というか、先ほど、山崎委員から炎上という話があったので、少し触れようと思うのですが、今回、このループの概念を取り入れたのは、今までは基本的に一直線上で物事が流れていくというのが政策決定のスタイルかなと思っていまして、その一直線上で流れていくときに、何か論点が整理できていないとか、そういう過程を置いていきながら、とにかく前に進んでいくみたいなのところがあって、市民の反感を買うとか、納得感を得られていないとか、そのような状況を産んできたのかなと思っています。

そこで、今回のループの概念を取り入れることによって、先ほどの片山委員のご質問にもあったように、意見収集ループの中でこの点は改めて聞いてみるべきだとなれば、もう一回、意見収集のサイクルが回っていくという形を想定し、今回、こういう形でたたき台としてやらせてもらっています。

○鈴木座長 ありがとうございます。

では、梶井委員、お願いします。

○梶井委員 今までは一直線上だったけれども、ループにすることによって、また新たな成果とか、いろいろと期待できるというご説明だったのですがけれども、今までとはどこがどう違っているのかという説明をしっかりとされたらいいと思うのです。今までの意見収集は政策決定が固まってからしていたのではないかと、だからこういう失敗があったのだから、もっと初期段階でやるべきだという提言だとか、従来とは違う成果がこういうふう期待できるということをもうちょっとはっきりと落とし込んでいかないと、説得力が弱いと思います。手間暇も労力も相当かかることを提言することになります。まず、庁内で反対があるのではないかと私は非常に懸念するのです。今までとはこういう違う効果があるのだということを、やっぱり説得力あるような、違いをはっきりとお書きになったらいいいのかなというふうに思いました。

○鈴木座長 ありがとうございます。

では、私から、これは別に修正してほしいという意味ではないのですが、今の議論にもありましたフィードバックという言葉についてです。ループという意味ではフィードバックでもいいのですがけれども、意味を調べてみますと、一部で共有というキーワードが入っているものもあるのですが、基本的には伝えることとなっています。

それはそれでいいのですが、意味合い的には、言葉尻を捉えるわけではないのですけれども、情報共有みたいな意味合いを含んでのフィードバックだと思っています。しかも、意見収集ループも議論ループも同じフィードバックという言葉を使っているのですが、この中を見ると、内容的に意味合いも少し変わってくるのかなという気がして

います。

ですから、キーワードとしてはフィードバックでいいのですけれども、もし可能であれば、何らかの補足としてフィードバックの意義が非常に大きくなってくるといいですか、効果に影響してくるところでもありますので、その辺も少し補足的に、意見収集でのフィードバックと議論でのフィードバックの中身を少し整理してもいいのかなという気がしていました。

一応、意見収集ループと議論ループの中にフィードバックについて書いてありますけれども、こういった手法的なことだけではなく、内容的なことも補足で書くといいのかなと思った次第です。やはり、ここではフィードバックが重要なのかなと改めて思った次第です。

○三上委員 今、同じようなことを思ったのですが、成人の日でもいいと思うのですけれども、このプロセスに当てはめたときに、こうなって、ああなってというのを具体的に書くのも例としては分かりやすいと思いました。

○鈴木座長 補足をいただきまして、ありがとうございます。

そのほか、何かございませんか。

○大村委員 今のお話にもあったように、このループの図がすごく大事だと思っていて、将来的には、市民目線で、できるだけ多くの市民の方がこのループの流れに乗っているという感覚で、自分も市政に参加しているのだという感覚で市政が発展していくことが重要だと思っています。そうすると、意見収集とか議論に参加することがこのループの入り口になると思うので、そこへの参加の呼びかけ、募集というのが入り口としてまずは重要だと思います。

また、先ほども山崎委員がおっしゃっていたように、このループに参加した市民の方に対してフィードバックがしっかりあると、一度、このループに入ってきてくれた市民の方が引き続き、議論だったりその先の実行段階というところにスムーズに参加していけるかなと思います。新しい政策をつくるためのプロセスとしてもこのループはすごく大事ですけれども、その流れに市民が一緒に乗っていくみたいなイメージとしても、この図はすごく理解しやすいと思いました。

将来的には、市政に参加することが特別なことではないという感じで多くの方がこういうループに参加してきたらいいなと思っていて、今回は成人式をテーマにこのループを実験的にやったと思うのですけれども、札幌市の中で同時多発的な形でいろいろなテーマに対してこのループが機能していけるといいなと思いました。

○鈴木座長 ありがとうございます。

今のお話を聞いていて感じたことですが、入り口として重要というお話がございました。この概念図に、実行段階ということでアウトプットというか、出口はあるのですが、入り口の矢印といいですか、そういうものがあると分かりやすいのかなと思ったのですが、大村委員、いかがでしょうか。そのような感じでよろしいですか。

○大村委員 はい。

○鈴木座長 ありがとうございます。

では、野田委員、お願いします。

○野田委員 全般的に面白い理論の流れで、なおかつ、モデルになっているなと思いました。

先ほどのアンケートは、情報提供をしっかりと行くと、行政の透明性が確保され、それで市民が協力の態度を持ったり、政府を信頼するというような流れが見えたような気がしましたけれども、今こうやってつくられている中で透明性が確保されていくと、信頼性を基に政策を判断していったり、参加を促進していたりということがなされていきます。そうすると、政策形成過程において、ネガティブな意見によって本来は望ましくない方向に強引に持っていかれてしまうことが少なくなるのかなということで、すごく興味深い取組だなと思いました。

とりわけ、予算の配分などを含めた政策の全体像を提供するとか、サイレントマジョリティを明確にするという意味でいくと、市民そのものの捉え方まで踏まえていますので、面白いなと思いました。

さらに思ったのが、政策の過程です。通常、政策過程モデルと言って、普段であれば、政策のいろいろな課題がある中で、何をアジェンダとして設定するのかという課題設定とか議題設定みたいなものがあって、政策が決定されて、実施されて、評価されるという一般的なモデルがあるのですが、その前のほうの段階で、何を議題するのかとか、どういうふうに情報収集をして何を重視していくのかというところに焦点を当てています。

ここは、通常、今まででしたら議会がその行為を行うという議論がかなり多いのですが、事実上、原則、行政職員の方々がいろいろな政策案を考えていますので、その中で市民が巻き込まれていって、市民の意見を収集していくという意味でも新しいモデルだなと思いました。

そこで、質問ですけれども、5ページのサイレントマジョリティの表です。サイレントマジョリティについて具体的にすること自体、ほとんど見たことがないので面白いのですが、これは、積極参加層から沈黙層までを含めて全部がサイレントマジョリティという理解のモデルのように見えるのです。積極参加層もサイレントマジョリティに入っているという理解でいいのですか。サイレントではない、顕在化されているマイノリティの人たちは、別途、どこかにあって、積極参加層はサイレントマジョリティに含まれているという理解でいいのでしょうか。その点を教えてほしいと思います。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） この積極参加層は、サイレントマジョリティではない人たちなので、潜在参加層以下という言い方は失礼かもしれませんが、下の層の方がサイレントマジョリティだということです。

○野田委員 分かりました。

最初の一文にある「サイレントマジョリティに効果的にアプローチするため、」という

のは、市民を四つに分けただけなのですね。そして、この下の三つがサイレントマジョリティであるということですね。分かりました。ありがとうございました。

○鈴木座長 表の左側に、サイレントマジョリティとか、顕在化層、潜在化層とか、何か言葉があると分かりやすいかもしれませんね。

では、片山委員、お願いいたします。

○片山委員 ある問題に対して、今はどこに来ているのかを市民が確認できたらいいなと思ったのです。そのとき、このグラフは行動主体が行政だと思うのです。行政の立場で課題を認識して、意見収集をして、分析と検討をして、市民にフィードバックをしてということなので、市民というか、行動主体が自分の場合の図があるといいなと思いました。

○鈴木座長 主語が行政になっているということですね。

○片山委員 そうです。それも必要だと思うのですが、市民が自分に置き換えたときに、今、自分はどこにいるのかを確認したいなと思いました。

○鈴木座長 二重のグラフになるのか、別途、用意するのかですね。言葉の表現もありますので。

○事務局（川村市民自治推進課長） 答申を念頭に考えたときに、行政に対してこういう仕組みがいいのではないかということかなと思うのですが、すみません、少し考えさせてください。

ただ、今、片山委員がおっしゃった視点というのは、我々が自治基本条例に基づいて市民自治を進めていくという大目標を考えたときには、市民側にとっても分かりやすいというか、ああ、なるほど、なるほどというのは必要だと思うので、その観点はすごくそうだなというふうに思いました。ありがとうございます。

○片山委員 矢印が内側と外側に二つに分かれていて、外側が行政で内側が市民でというのがあってもいいのかもしれないですね。

○三上委員 各フェーズにおける自分、市民の位置がどういうふうに回っているかということですよ。確認フェーズには参加できないとか、そういうことですよ。

○片山委員 そうです。分かれ方が少し違うのかもしれないです。

○鈴木座長 その辺は難しいところもあるかもしれませんが、少し検討していただければと思いますし、委員の皆さんもいいアイデアがございましたら、事務局までご提供いただけますようお願いいたします。

○事務局（川村市民自治推進課長） 先ほど、寺川から説明いたしましたように、答申案については、本日の議論も踏まえて我々事務局のほうで作成し、委員の皆様を確認しながら進めていくということで、約2か月後の第10回会議までにそういった過程を経たいと思っています。その間、メールなどでいろいろとお世話になりますけれども、よろしくお願いいたします。

○鈴木座長 分かりました。

では、三上委員、お願いします。

○三上委員 6 ページについて、今、アイデアが浮かんでしまったのですが、言ってもいいですか。

(仮称) 市民サポーターズ制度で想定される課題として、途中離脱のリスク (参加意欲の低下) があるのですが、これが出てくると、先ほどのループに巻き込めなくなってしまうというか、1 回巻き込まれたけれども、何か嫌になって飛んでいくみたいなイメージだと思うのです。その場合、やっぱり、巻き込まれるほうも自分で意識して巻き込まれて、気持ちよく巻き込まれていくというモチベーションが必要だと思います。

例えば、札幌人と言っているのか分からないですけれども、そのライフステージとマッチした巻き込み方とか、年がら年中、巻き込んでもらっても大丈夫な人と、冬の間だけの人と、夏の間だけの人というかもしれませんし、育休中だったら、巻き込まれてもちょうど自分ごとになっているから、女性の何とかの権利とか子育てに巻き込まれて、ちょうど自分ごとになれるライフステージもあると思うのです。

年齢が行って子どもが巣立っていった後は、子育てについて、先輩としては言えるけれども、今の子育てのことに巻き込まれたとしても、何か昔話をしているだけになってしまうから、それであれば、介護のほうに巻き込まれたら、自分ごととしても何年後かにそれが来てしまうと思えるし、介護にリアルで携わっている方と、その後、介護に携わりそうな人をマッチングさせて、巻き込まれると、将来の自分ごとに参加できそうな感じがすると思います。ですから、参加テーマと参加方法だったり、オンラインで参加できる方法をちゃんと組み合わせてあげたり、仕組みづくりがあるといいのかなと思いました。

あとは、ライフステージに合った選択式のインセンティブの用意ですね。単なる現金が心地よい世代もいれば、そうではなく、何とかの権利だったり、保育所で無料で何かできる権利だったり、何かあるかもしれないですね。それが全部、行政から税金で提供するというインセンティブではなく、関連企業からのメリット提供による協賛というか、例えば、子育てに強い企業がいたら、そういうところからの物だったり、セミナーに無料で参加できるとかですね。あとは、サポーターがランクアップしていく制度的なものでもモチベーションが上がります。先輩面ができると、今度は、その先輩が後輩に市民同士で教え合うというのもありますし、それが (仮称) 市民ファシリテーター制度にも絡んできたりするのかなと思いました。

学校教育での参加プログラムでいくと、子どもの意識改革はそこでできて、将来、まちづくりサポーターになっていく循環、これもループなのか、サイクルなのか、分かりませんが、ただ、ここで一番いいのが、子どもを巻き込むことで、その子どもによる親の巻き込みみたいなものもあるので、親子参加というものの親の意識改革に回っていくというか。

いずれにしても、今日は何かぐるぐる回る議論だと思うのですが、頭がぐるぐるとならないようにうまく整理して、気持ちよく巻き込まれる、それがナッジのことでいいのかは分かりませんが、そういうこともやっていくのと、企業も責任として巻き込んでい

くというか、行政だけではなく、参加できる者にですね。ですから、先ほどのループの中には、市民も行政も、それから、企業市民としての巻き込まれ方もあるのかなと思いました。

○鈴木座長 ついでということではございませんが、私は、市民サポーターズにもいろいろあると思っていて、これは含んでいると思うので、あえて書かなくてもいいと思いますけれども、個人もあれば、今も企業という話がありましたけれども、子育てサロンですとか、そういった団体も含まれるのかなと思っています。

また、学校教育についても、参加プログラムだけでなく、最近では大学や高校でも探究学習やPBLといったものも結構行われるようになってきていますので、コラボ企画といえますか、フィールドを提供していくというような発想もいいのかなと思っています。

それから、三上委員の話を聞いて感じたのですけれども、これにもフェーズがあって、ループになるのか、フェーズになるのかは分かりませんが、学校教育から、サポーターになって、それからファシリテーターになるとか、そういう段階があってもいいのかなと思いましたので、この表は少し工夫してもいいのかなと思いました。

もう一つ、これもよいアイデアがあるわけではないのですが、5ページの潜在参加層に負担軽減型ときっかけ型があるのですけれども、アプローチに関してはほぼ同じになっているのです。共通する部分もあるかと思うのですけれども、例えば、きっかけ型をそこまで掘り下げていくというのは非常に意義のあることだと思いますので、その辺の表現なり、何かアプローチなり、これまでの議論の中での知見ですとか、よいアイデアがあれば少し入れ込んでいくと、共通する部分もあって、また、きっかけ型の層をどうやって潜在化させていくのかというところでいい言葉があればいいかなと思いました。

今、よいアイデアがあるわけではないのですけれども、皆さんと一緒に考えていければいいかなと思いました。

○三上委員 そこについても、今、アイデアをメモしていました。

きっかけ型は、多角的なきっかけづくりの仕組みをつくったらどうかなと思いました。先ほどもありましたけれども、ライフステージによって、興味関心はどんどん変わってきますので、そういう年代層と、全く興味はないけれども、将来的に興味を湧くみたいなのところに対してアプローチをかけていたり、別な何かの集まりのときに、別な興味関心のあるテーマを案内していくとか、興味関心事を1個の中だけで回さず、ダブらせてネットワーク化していくことも大事なかなと思いました。

ですから、ライフステージにおける興味関心と市政との関係を分かりやすく見える化しながら、戦略的に別な興味関心事のきっかけづくりをしてあげるといえるのか、そういう組み合わせをしていくと、意外と、では参加してみようかなというふうになると思いました。

ちょっと分かりづらいですかね。前にも一度、同じ話をしたかもしれません。

○鈴木座長 きっかけのほうは、今回の成人式もそうですけれども、テーマに身近さがあるとか、普段の生活での親和性といいますか、親近性といいますか、その辺はあるのかな

と思っていましたけれども、どう表現すればいいのかなというのは今後の課題にしたいと思います。

ありがとうございます。

では、全体を通して皆様からございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 今後、メール等で情報共有もしていただきながら、意見交換をする機会もあるかと思うので、その辺で少し詰めていければいいかなと思っています。

○事務局（神市民自治推進室長） 今日、皆さんからいただいたご意見は、これから答申に言葉として入れていくとか、図にしていればと考えております。

その後のイメージとしまして、来年度以降になってきますが、今、札幌市の中で除雪や排雪をどうしていくかという大きなテーマがあって、そこで私たちのこのループが本当に機能するかどうかということがあります。今までは成人式でやりましたけれども、別なものでもこのループが機能するかどうか、雪を題材にやれるのではないかなと思っているのですが、これは庁内の了解も合意も得られていませんので、もし、全庁的に市長まで了解が得られれば、今回のこのループ、提言いただいた内容で、実際にもう少し大きな課題でやれるかどうかを検証しながら見ていくというステージを次のところでは考えています。イメージ的にはそんなふうに思っています。

それを基にして、実際にガイドラインをつくるとか、庁内のチェック体制をどうしようとか、具体的にそこにたどり着くのかなと思っています。

○鈴木座長 ありがとうございます。

夜8時の鐘が鳴っていますけれども、ただいまもございましたように、今回は成人式という一つのテーマで試行されたわけですが、個人的には、やはり、違ったテーマでどの程度通用するのも気になるところですし、今も雪の話を出していただきましたけれども、以前に伺ったところ、札幌市の市民の声で、除雪、排雪が件数としては一番多いとも耳にしていますので、その辺も大きなテーマになるのかなと思いました。

それでは、全体を通して何かございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○鈴木座長 では、事務局から連絡事項があればお願いします。

○事務局（寺川市民参加推進担当係長） 本日はありがとうございました。

先ほど、課長の川村のほうからありましたように、今後、答申案を我々のほうで作成いたしまして、皆様にご確認いただき、次回の会議で答申案を確定させる作業が待っています。

基本的にはメールでいろいろと情報共有しながらという形になりますけれども、出来上がった案は、一旦、座長にたたき台をご確認いただいた上で、その先、皆様にも修正をいただくような進め方で考えているのですけれども、皆様、よろしいでしょうか。

（「異議なし」と発言する者あり）

○事務局（寺川市民参加推進担当係長）　ありがとうございます。

それでは、2月中には座長にご覧いただけるような形にしたいと思っておりますので、皆様もお忙しい時期になって恐縮ですが、3月に入ってからご確認いただくような時間をいただければと思っております。よろしくお願いいたします。

3. 閉　　会

○鈴木座長　それでは、長時間にわたるご議論をどうもありがとうございました。

これをもちまして、第9回第5次市民自治推進会議を終了させていただきます。

どうもありがとうございました。

以　　上